

台湾における華人移住による 集落形成と初期の都市化

—台北を事例に—

葉 倩 璋

1. はじめに

現在地域は過去の地域の堆積の上に成り立っており、将来から見れば、現在もまた過去の一断面に過ぎない。しかし一見連続的な地域変遷のなかにも、その地域の発展の方向性を定める基盤となった時代的断面がある。その地域の特性を明らかにするには、基盤となった「過去におけるその地域」を抽出し、その地域の空間的構造、またその構造を生みだし、変容させていった要因を究明することが必要である。

本論文は、清代、既にある程度完熟した文化を有していた華人が、移住という人為的動機によって台湾という新天地において地域形成を行い、そこに創りだされた地域空間が変容していく過程、及びその変容の要因を明らかにすることを目的としている。

台湾は、中国本土から持ち込まれた諸特性が現在の地域の基盤となっているが、移住の際の諸条件によって、明確な特色を持つ不均衡な社会、移住民社会が形成された。それが、都市化を経て、定住社会が形成されていく過程において、台湾は、清政府にとって辺境の地とみなされ、積極的な行政介入がなかったため、その都市化は移住民の手によらなければならなかった。つまり、強力な行政指導のもとで都市化が進められたのではなく、内からの都市化を誘う要因によって成されたことである。その要因としての経済的、交通的、社会的諸要因が、都市化にいかに関与したかを、現在の台湾の中心的都市である台北を事例に、特に初期都市核であった萬華（旧地名＝艋舺）、大稻埕地域を中心に考察した。従って、本論文が涉及する年代は、清朝領台の康熙22（1683）年から、日本領有となる光緒21（1895）年までである。

2. 台湾への華人移住

台湾への移住民は、大半が閩粵（福建・広東省）地方出身者であるが、この地方における慢性的人口過剰とそれによる食糧難、経済的圧迫からの脱却というプッシュ要因と、台湾の農耕に適した温暖湿潤な気候条件と広大な開拓处女地というプル要因とによって移住が引き起こされた。かれらは高度に集約された生産技術を有し、それは移住後も気候条件の相似する台湾での開墾を容易ならしめ、早い速度で開拓地が拡大する有利な条件を提供していた。

台湾への移住はオランダ時代(1624～1662年)¹⁾、明鄭時代(1663～1682年)²⁾、そして清代(1683～1895年)と三つの波があったが、オランダ、明鄭のいずれの時代の移住民も殆どが中国本土へ送り帰された。従って、清代の移住過程は未開の原住

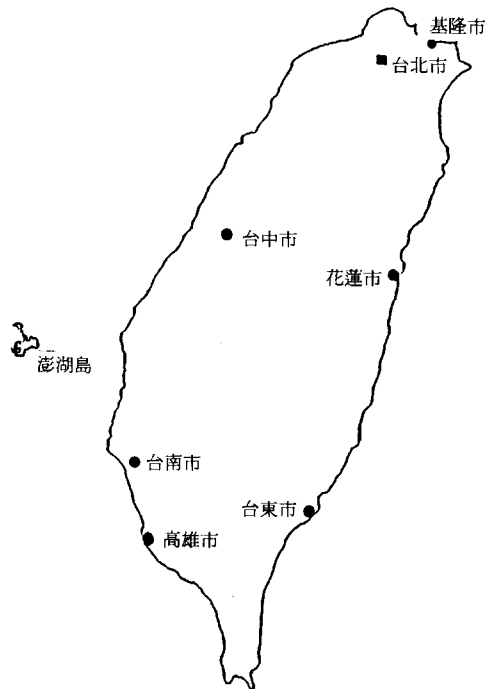


図1 台湾省主要都市

民(蕃人)の集落が点在する状態への入植となり、華人移住民は最初からマジョリティとして到来順に、開拓を進めていくことができたのである。

台湾は、鄭成功が1662年、ここに反清の拠点を置くや、奸者逃亡の地とみなされ、康熙23(1684)年に福建省に隸属する三県を置いた後も³⁾、清政府は渡台に関して厳しい制限を加えた。「移民三禁」と呼ばれるもので、煩雑な渡航手続き、家族同伴の禁止、広東省の客家⁴⁾の渡航禁止などで、この禁令は台湾移住民社会の形成に対して大きな影響を与えるものであった。

3. 台湾移住民社会の特色

都市化が行われる前提である移住当初の地域空間及び社会のなかに、以下の明らかな特色を捉えることができる。

I. 南部への人口の偏在；オランダ時代、明鄭時代同様、清代の開拓の拠点も台湾南部に置かれ、嘉慶16(1811)年当時、台湾南部の嘉義、臺灣(現台南)両県に総人口の67.1%が集中していた。そのため、19世紀初めまで、台南が行政・軍事・経済的中心であった。

II. 男女比の格差；移民三禁では家族を同伴して渡台することを禁じていたため、当初の移住者は独身男性ばかりで、このいびつな男性社会は当然、社会的な不安定をもたらした。⁵⁾

III. 地縁的結合；移住、開拓という危険行為には集团的結合を必要としたが、渡台には家族の同伴が禁じられていたため、移住民は同郷者同士が連帯して移住した。その結果として、集落における社会関係はおおむね地縁的關係で結合されることになった。地縁的結合は省ごとよりもむしろ同一省内の府ごと、さらに下位の県ごとで行われたが、これは、閩粵地方は山がちなため相互交通が困難で、地域ごとに方言や風俗習慣に顕著な差異があることによる。

IV. 住みわけ；地縁的結合による集落形成の結果として図2のような住みわけの構造を呈することになった。移民三禁で、広東地方の一部の住民(客家)は、海賊の巢窟だとして渡台を禁じられたことから、広東省からの移住民は福建省の移住民に遅れをとり、台湾では移民三禁の制限を受けなかった福建人が好条件の西部海岸の平野部を占

め、広東人はその内陸部に居住することを余儀なくされた。また、福建人同士でも住みわけが見られ、特に台北などの都市部でその現象は明らかであった。

V. 分類械闘；異なるグループが武器を取って闘うことを分類械闘というが、政治的統制の無い不安定な社会環境とも相まって、各地で異なる地縁グループ間の分類械闘が頻発した。

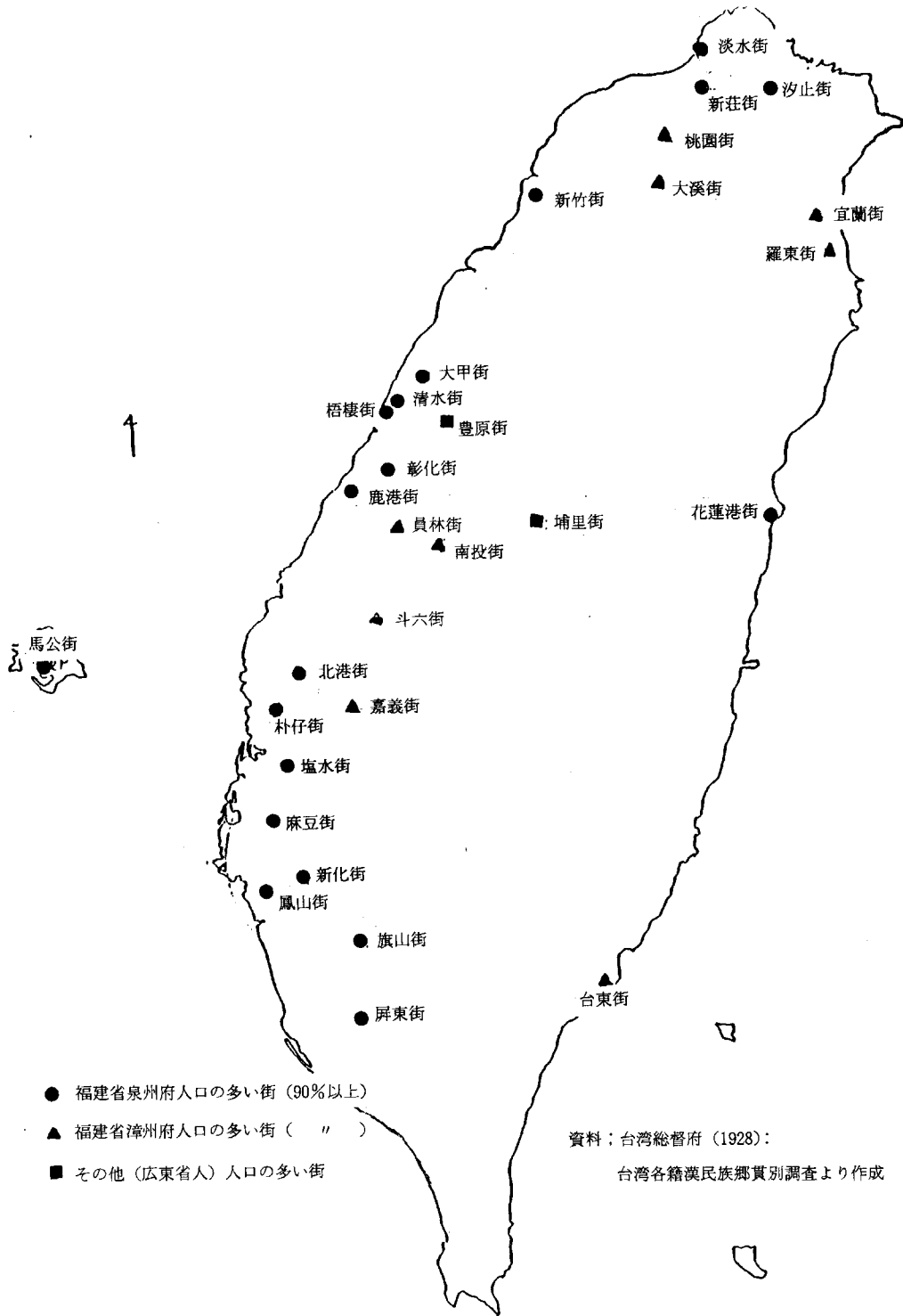
VI. 寺廟の建立；各々の郷土には、各々の土地の守護神があり、移住民達は、集落形成した後、一定の領域に同郷出身者がいる程度集住すると、そこに、かれらの土地神を奉祀した廟を建立した。各集落において、寺廟は祭祀ばかりでなく集議、親睦、互助の場でもあった。寺廟は移住民社会の地縁的結合を象徴するものであると同時に、地縁的結合を強化するものだったのである。

4. 台北における初期の都市化

都市化の要因として、経済的要因、交通的要因、社会的要因が挙げられるが、これらは互いに重層的な関連を持ちつつ、都市化にインパクトを与えた。

まず経済的要因としては、1860年の北京条約締結以前は大陸との交易を行う「郊行組織」、1860年以降は、台湾の開港に伴って進出した西欧列強諸国資本、すなわち洋行(外国商社)による外国貿易とが挙げられる。前期の繁栄の中心は艋舺にあり、後期は大稻埕にあった。

「行」は卸問屋的機能を持つ、経済活動での基本単位で、一方「郊」は「行」で組織された商業団体であり、経済界で最も影響力を持つ組織である。郊の目的は商人の団結と共同の利益の追及をはかると共に、その達成によって地域の繁栄に結びつけようとするもので、そのために祭祀公益事業も積極的に取り仕切っていた。郊には交易地を同じくする行で組織された大郊と、同業者の行で組織された小郊の二種類がある。大郊はもともと同郷者同士で組織されたものが多く、台北には泉郊、北郊、厦郊⁶⁾などがあって各々活動していたが、1860年ごろにこれらが統合され「淡水三郊」となり、さらに鹿郊、香郊⁷⁾が加わって「台北五郊」に拡大された。本来、地縁的性格を持っていた郊の統合拡大の過程の内に異なる地縁グループ



- 福建省泉州府人口の多い街 (90%以上)
- ▲ 福建省漳州府人口の多い街 (")
- その他 (広東省人) 人口の多い街

資料：台湾総督府 (1928)：
台湾各籍漢民族郷貫別調査より作成

図2 各人口の多い街分布図 (1926)

の融合の現象を見出すことができる(図3)。

1860年の北京条約による台湾開港後、台北では洋行が大稻埕において茶業を興し、烏龍茶貿易によって、台北に未曾有の経済的繁栄をもたらし、経済的中心地は台南から台北へと移行した(図4)。それと同時に洋行進出の衝撃は、「鎖国状態」にあった社会経済に対してその経済構造を変化させる契機にもなり、外国資本を前に、利害対立していた華商同士も結束せざるを得なくなったのである。経済的要因は都市化に対して直接的に働きかけるものであり、また、単に経済的側面にとどまらない総合的な影響を与えた。

交通的要因としては、淡水河の河川交通と街路網の発達とがある。

淡水河は台北の集落発生に深く関与していただけでなく、大陸との交易、西欧諸国との貿易を通じて、台北の発展を支えるものであった。台北盆地における繁栄の拠点が、新莊から艋舺(萬華)へ、さらに大稻埕へと淡水河に沿って下流に移行していったことも、その重要性を物語るものであろう(図5)。

計画地域でない艋舺・大稻埕の街路網は、いずれも自然発生的に形成された。艋舺においても大稻埕においても、次々に建立される寺廟と寺廟とを結ぶ形で街路網が発達していった。寺廟周辺に「市」的な物資と人との交流が起こり、より特化

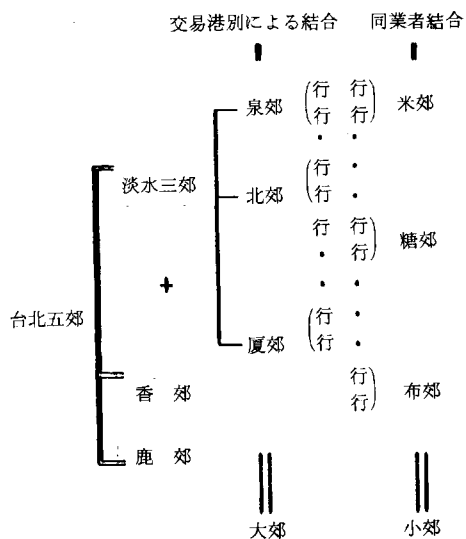


図3 台北「郊」統合拡大組織図

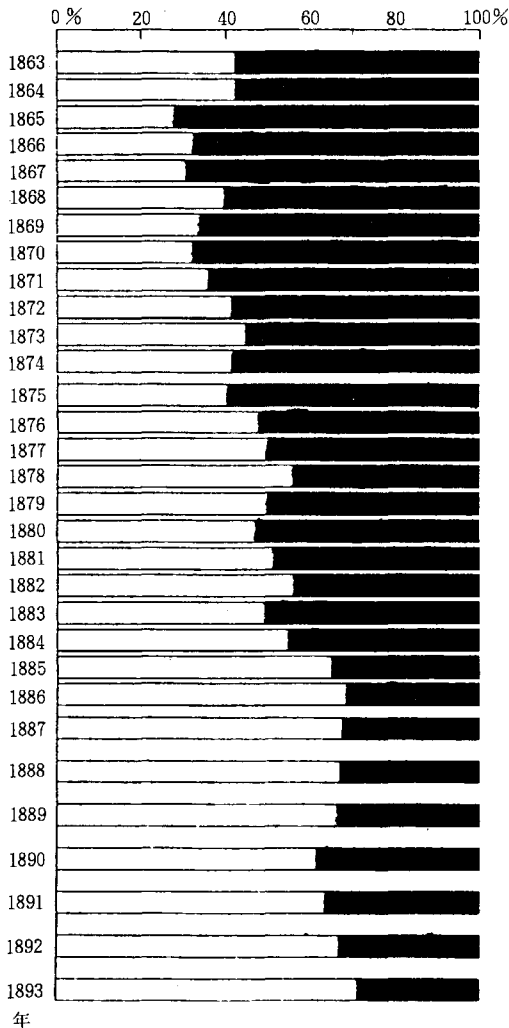


図4 台湾外国貿易額港別割合

資料：連雅堂(1920)；『台湾通史』より作成

した商業機能が集積していくのである。寺廟を中心に派生した街路網が商業的な動機によって分化していく、その過程は都市化の進展を如実に表している。

交通的要因は経済的要因と相関関係を持ちながら、諸物資の流通や人口の集積を促し、都市化を推進する根幹となったものである。

都市化に直接的に外部から推進したのが、経済的要因とそれに伴う交通の発達だとすれば、社会

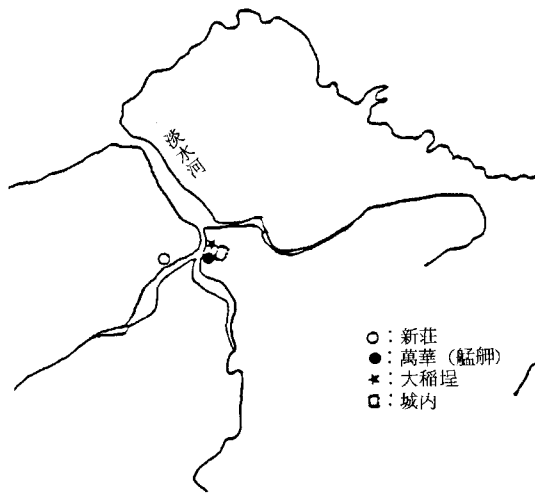


図5 台北地区主要地域

的要因は内部から都市化を推進したものであり、また、融合化の現象を最もよく説明するものといえることができる。

社会的要因としては、北部台湾への人口集中と宗教上の奉祀神の統一化が考えられる。

19世紀後半からの北部における経済繁栄は、南部から北部への経済重心の移行と同時に、北部への人口集積を引き起こし、特に台北は人口密集地となったため、住みわけの状態が崩壊し、混住が進んで地縁的結合が薄れていく結果となった。人口の集積は移住民間の融合化をもたらす有効な誘因となったのである。

もう一つの社会的要因は、宗教奉祀の統一化である。すなわち、媽祖、閩帝等の祭祀神が、台湾全土で普遍的に信仰されるようになったことである。媽祖は元来、閩南泉州・漳州人の郷土神であったが、1850～70年に至って、全島各地で媽祖廟の建立が見られた⁹⁾。媽祖の普遍的信仰は各地縁グループの融合の現れとして捉えられるべきであろう。

また商業神、閩帝廟の建立は一步進んだ段階の融合とみなすべきである。閩帝廟の建立は、商業の発達があり、経済繁栄があることを意味する。台湾での普遍的な閩帝廟の建立は19世紀後半とされ⁹⁾、商業往来による異なる地縁グループの共同建立という状態となっている。奉祀神の統一化、普遍化は、移住民社会における最大の特徴であっ

た地縁的結合が崩壊し、移住民同士が融合を見せたことを示している。

5. 結語

以上のように移住民社会の都市化の経済的要因、交通的要因、社会的要因によってもたらされた結果を統合すると、いずれも移住民同士の融合化という現象になって現れている。つまり、台北における初期の都市化は、経済的繁栄とそれによって都市的景観などに現れる一般的な都市化過程と同時に、移住民同士の融合化の過程を必要としたのである。

都市化の結果、台北には艋舺、大稻埕に隣接する地域に、光緒4(1878)年、台北府の設置に伴い城内地域が形成され、ここに光緒17(1891)年、台湾省政府が置かれる。この台北府設置時を、初期の都市化の完成と見なしたい。なぜならば、それまでに艋舺、大稻埕に既に備わっていた経済的・軍事的中枢機能に、行政及び文化・教育的中枢機能も付加されたからである。そしてここに、台北という独自の地域空間が成立することになる。

注

- 1) オランダ東インド会社は、台湾で米・糖を生産、輸出を図り、その労働力としての華人の移住を奨励した。
- 2) 鄭成功が反清を唱え、多数の兵士とその家族が移住。この時既に清代(1636～)に入っていたが、鄭は明の復興を掲げていたため、この時期は「明鄭時代」と称されている。
- 3) 台湾は1891年に初めて台湾省となるまで、福建省に属していた。
- 4) ハッカ。広東省の惠州・潮州地方出身者に多い。
- 5) 例えば諸羅県の大埔庄(現埔里)という村では総人口257人中、女性は1人という記録が残されている。
- 6) 泉郊は、中国泉州、北郊は、中国北部の天津・上海などと、厦郊は厦門と交易する郊。
- 7) 鹿郊は、台湾中部の鹿港と、香郊は香港と交易。
- 8) 許嘉明；『彰化平原福佬客の地域組織』、中央研究院民族学集刊、第36期、pp.180-185

参考文献

1. 石田 浩 (1985) : 『台湾漢人村落の社会経済構造』, 関西大学出版部
2. 王 一剛 (1969) : 『台北三郊與台灣的郊行』, 台北文献直字, 9・10期
3. 台北市文献委员会編 (1983) : 『台北市發展史』 (一), pp.27~41, (四) pp.307~320
4. 台北市文献委员会編 (1980) : 『台北市路街史』, pp.35-p.47, pp.165-p.189, pp.267-289
5. 台湾省文献委员会編 (1960) : 『台湾省通志』 卷二, 人民志人口篇, 第一冊, pp.58-59
6. 連 雅堂 (1920) : 『台湾通史』 卷二十五, 商務志
7. 連 溫卿 (1953) : 「大稻埕的經濟發展」, 台北文物, 第二號

The Settlement and the Early Urbanization by the Chinese Immigrants in Taiwan

—In the Case of Taipei—

Seii YOH